宮崎市文化財調査報告書　第93集

竹篠遺跡

たけ　しの　い　せき

携帯電話用通信無線基地局建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書　第93集

竹篠遺跡（たけしのいせき）

携帯電話用通信無線基地局建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

宮崎市教育委員会

序　文

本書は、携帯電話用通信無線基地局建設にともない平成24年度に実施された、竹篠遺跡発掘調査の報告書です。

竹篠遺跡は市街地北西部、瓜生野地区に所在する遺跡です。瓜生野地区には、本書に収められた竹篠遺跡のほかにも、瓜生野小学校校庭遺跡などいくつかの遺跡が知られています。また、竹篠遺跡の南隣には鎌倉初期の作とされ、国の重要文化財に指定されている木造薬師如来及び両脇侍像がある王楽寺があります。王楽寺は室町時代から天正・慶長年間に栄えた古刹で、境内には現在も古い時代の石塔や板碑が残されており、往時の面影を知ることができます。

今回の発掘調査では、古墳時代の人々が住んでいた住居の跡が確認され、今から1400年ほど前の瓜生野に生きた人々の生活の様子の一部分を知ることができました。また、そのほかにも、溝状の遺構なども確認されており、この瓜生野地区の歴史の奥深さをあらためて知ることができました。

地中に眠る遺跡は先人が残した歴史の積み重ねです。私たちは、まさにその土台の上に今を生きています。こうした事実に感銘を受けるだけでなく、どのように永く後世に伝えていくのかについて深く考えていかねばなりません。

本書がその一つのきっかけとなり、宮崎の歴史、文化を守っていくための一助となれば幸いです。

宮崎市教育委員会
教育長　二見俊一

例　言

1　本書は、宮崎市教育委員会が平成24年度に実施した竹篠遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成24年６月18日から平成24年７月６日までの期間実施した。整理作業は平成24年10月９日から平成24年10月15日の期間実施した。

3　調査組織

調査主体　宮崎市教育委員会

総括	文化財課長	田村　泰彦
	副主幹兼埋蔵文化財係長	島田　正浩
事務	主　　査	鳥枝　誠
担当	主任技師	西嶋　剛広（現場・整理）
	嘱　託　員	前田　美恵子（整理）

4　本書の執筆、編集は西嶋がおこなった。

5　掲載した図面のうち、現場における実測は西嶋がおこなった。遺物の実測は西嶋、前田が整理作業員の協力を得ておこなった。現場、及び出土遺物の写真撮影は西嶋がおこなった。

6　本書で使用する遺構略号は以下の通りである。　住居跡：ＳＡ　溝状遺構：ＳＥ　ピット：ＳＨ

7　本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育員会で保管している。

目　次

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境
第１節　地理的環境 ……1
第２節　歴史的環境 ……1
第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過
第１節　調査に至る経緯 ……3
第２節　調査の経過 ……3
第Ⅲ章　調査の成果
第１節　調査成果の概要 ……4
第２節　古墳時代の遺構と遺物 ……5
第３節　古墳時代以外の遺構と遺物 ……7
第４節　遺構外出土遺物 ……8
第Ⅳ章　まとめ ……10

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡 ……2
第２図　調査区平面図 ……4
第３図　住居跡 ……6
第４図　住居跡出土遺物 ……7
第５図　溝状遺構、溝状遺構・ピット出土遺物 ……8
第６図　遺構外出土遺物 ……9

表　目　次

第１表　遺物観察表 ……9

図　版　目　次

図版１　調査区全景 ……12
図版２　住居跡 ……13
図版３　住居跡及び住居跡出土遺物 ……14
図版４　溝状遺構及び溝状遺構出土遺物 ……15
図版５　ピット及び遺構外出土遺物 ……16

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境

竹篠遺跡は、宮崎市街地北西部の大字瓜生野字竹篠に位置する。遺跡は、垂水公園付近を頂部とする通称垂水台地から南に向かって舌状に伸びる丘陵のうち、最も西側にある竹篠丘陵の南縁付近に位置している。遺跡周辺は丘陵頂部にある狭い平坦面上に位置しており、現在は宅地や畑地などとして利用されている。調査地周辺の標高は約80mである。

この丘陵縁辺部は南に向かって大きく開けており、眼下には、都城盆地から宮崎平野南部を貫流し、太平洋へと注ぐ大淀川が流れている。さらにその前方には現在の宮崎市街地を望むことができる眺望の地である。

第２節　歴史的環境

宮崎市域ではこれまで多くの遺跡が確認されている。中でも、市内海岸部を南北方向に伸びる４本の砂丘列のうち、内陸側の２本は縄文時代後晩期頃に形成されたと考えられているが、その２本の砂丘列上の縁辺部や、台地上、丘陵上に多く見られる傾向がある。

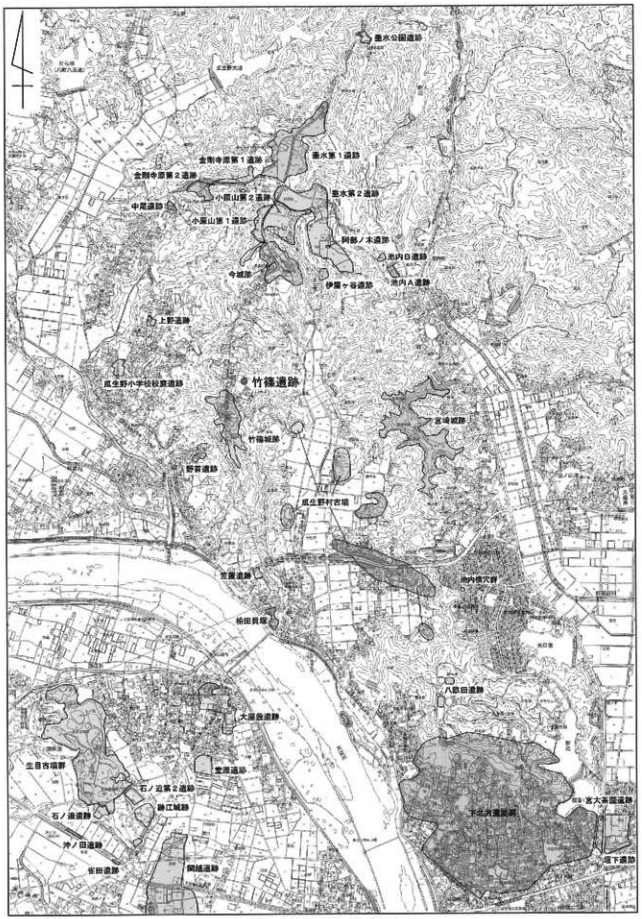
竹篠遺跡周辺にもいくつかの遺跡が確認されている。旧石器時代の遺跡は多く確認されており、台地頂部にある垂水公園遺跡では、ナイフ形石器が採集されたほか、台地中央部付近には、ナイフ形石器、剥片尖頭器、角錐状石器が出土した垂水第１遺跡、ナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器、細石刃などが出土した垂水第２遺跡がある。これらの遺跡からやや西側にある金剛寺原第１・２遺跡からも、ナイフ形石器や角錐状石器、スクレイパーなどが確認されており、垂水台地所在の旧石器時代遺跡は宮崎平野部のＡＴ降灰以後の旧石器文化を知る上で重要な役割を持つ。

縄文時代の遺跡には、上記の垂水第２遺跡で早期の土器が確認されているほか、集石遺構が確認された伊屋ヶ谷遺跡、小原山第１遺跡などがある。

弥生時代から古代に位置付けられる遺跡は、あまり確認されていない。弥生時代遺跡には中尾遺跡がある程度である。古墳時代遺跡は竹篠遺跡で確認された住居跡のほか、伊屋ヶ谷遺跡で住居跡が１軒確認されている。古墳は台地周辺に多く確認されており、県指定史跡の「瓜生野村古墳」や墳長30mの前方後円墳である野首古墳のほか、竹篠丘陵上にも数基の古墳が存在していたと言われている。古代の遺跡には、土師器片などが出土している瓜生野小学校校庭遺跡がある。

中世では竹篠遺跡隣接地に竹篠城跡が所在しているが、詳細は不明である。竹篠丘陵の東向かいの丘陵上には、宮崎城跡がある。宮崎城跡は遺構の良好な保存状態と併せて、城主であった上井覚兼の日記が残されており、中世山城の様子や戦国武士の生活を詳細に知ることができる稀有な山城である。また、竹篠遺跡南隣には、王楽寺が所在している。王楽寺は室町時代から天正・慶長年間に栄えたと言われる古刹で、本尊であり、鎌倉初期の作とされる木造薬師如来及び両脇侍像は国指定重要文化財となっている。

近世以降の竹篠丘陵については、その様相が明らかでない。現在は王楽寺のほか住宅地や畑地が広がっている。



第１図　周辺の遺跡（S=1/25000）

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

平成24年１月５日、携帯電話用通信無線基地局の建設にともない、宮崎市大字瓜生野字竹篠1015番１における埋蔵文化財の有無について照会がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「竹篠城跡」に近接していたことや、地理的な状況から埋蔵文化財の存在が予想されたため、平成24年２月16日に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。その結果、調査地内において、住居跡、ピットと思われる遺構の存在が確認され、また、それらにともなって土師器、須恵器などの遺物が確認された。

そのため、事業者と埋蔵文化財の取扱いに関する協議をおこなったが、建設物の構造、工法などとの兼ね合いから、遺構の破壊を免れることができないと判断された。したがって、携帯電話用通信無線基地局の建設によって、遺構に影響の及ぶ範囲である49㎡を対象として、本発掘調査を実施することとなった。現地における本発掘調査は平成24年６月18日から平成24年７月６日までの期間実施した。現地での本発掘調査終了後の室内整理作業については、平成24年10月９日から平成24年10月15日の期間実施した。

第２節　調査の経過

調査はまず、重機を用いた表土の除去作業からおこなった。表土の除去後には、人力による調査区内の清掃、撹乱土の除去作業をおこないながら、遺構の検出作業をおこなった。検出した遺構は、順次掘削をおこない、掘削の進んだ遺構から記録作業を実施した。記録は、手測りによる実測作業、35㎜フィルムカメラを主体とした写真撮影によりおこなった。調査区全体の写真撮影時には、高所作業車を用いた。調査区の座標については、近隣に所在する座標既知点より、座標移動をおこなって求めた。

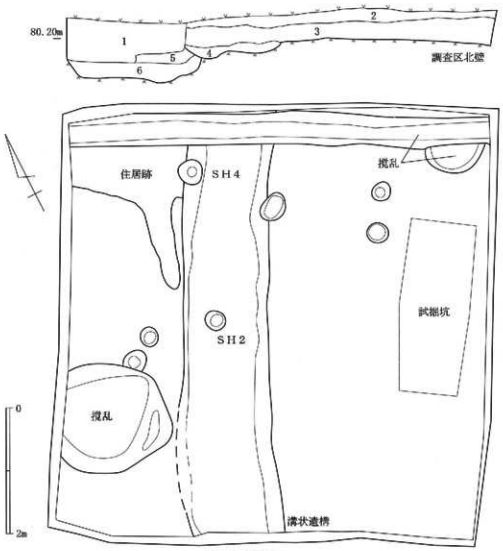
調査の終了後には、重機による埋め戻し作業をおこない、調査前の状態に復旧して現地での作業を終了した。

高所作業車での写真撮影

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査成果の概要

調査は、鉄塔の建設により遺構に影響が出る範囲に調査区を設定しておこなった。調査地は現況において畑地として利用されているため、表土から20cm程度は耕作による撹乱を受けており、一部では、畑地として利用される以前のものと思われる溝状や土坑状の撹乱が確認され、近世陶磁や近現代の遺物が出土した。遺構検出は、耕作土の下層にある褐色の地山層においておこない、古墳時代後期の竪穴住居跡、古代以降の溝状遺構のほか、いくつかのピットが検出された。また、これらにともなって、土師器をはじめとする遺物が出土している。



北壁所面土層注記
1　畑　　土：暗褐色土。締り無、粘性有。試掘トレンチ埋戻土。
2　表　　土：暗褐色土。締り、粘性有。土器片、土器粒、炭化物等含む。
3　撹　乱　土：暗褐色土。締り有、粘性有。土器片、土器粒、炭化物を多く含む。
4　ＳＥ１埋　土：にぶい黄褐色土。締り弱い、粘性有。炭化物、土器粒を含む。
5　カマド張方埋土：にぶい赤褐色土。締り、粘性有。焼けた粘土ブロック炭化物を含む。
6　住居跡張方埋土：暗褐色土。締り、粘性有。土器片、炭化物、礫土を含む。

第２図　調査区平面図(S=1/60)

第２節　古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡（第３図）

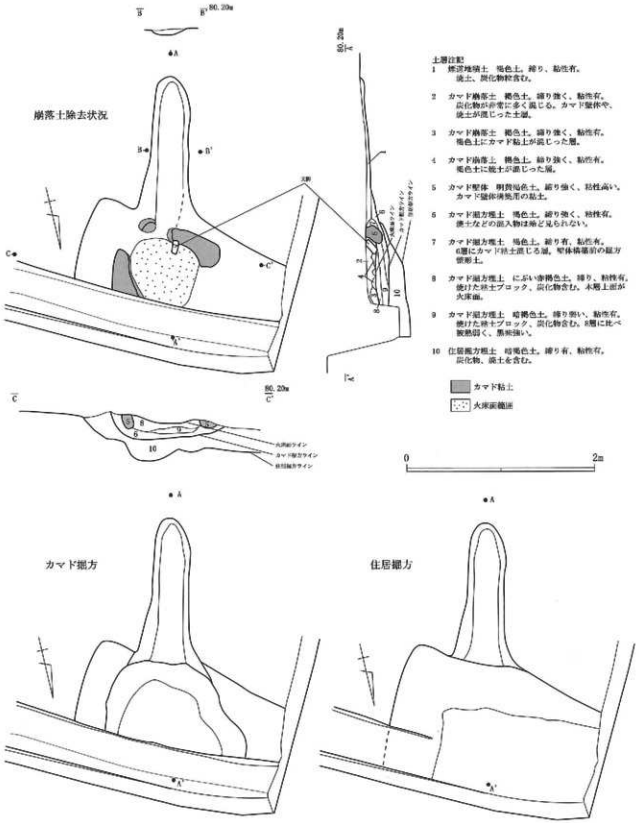
遺構　調査区北西隅で検出された。耕作による撹乱の影響で、住居はかなり削平されており、検出した面がおおむね住居の床面という状況であった。カマドを持つ竪穴住居であるが、その大部分は調査区外に位置しており、調査区内では、住居跡の南東隅の一部が確認されたのみである。そのために、住居の形態や規模を知ることができず、柱穴も確認できなかった。調査区内で確認された部分の規模は、カマドの煙道部分を除くと東西2.2m、南北0.9mである。住居は、掘方に暗褐色土を50cmほどの厚さで埋めて貼り床がなされていた。貼り床の上面において明確な硬化面は確認できなかった。

カマドは作り付けのカマドで、住居南壁の東隅部分に位置している。煙道は住居南側に向かって長く突き出しており、住居壁からの長さは1.5mである。火床面は住居壁より内側にあり、被熱により強く赤化していた。カマドの壁体には、明黄褐色の粘質土が用いられており、内壁は熱を受けたことで部分的に赤化し硬化していた。削平の影響で残存状態が悪く、火床面から上は10cmほどしか残存していない。カマドは、住居への貼り床後に、やや不整形で大型の掘方を掘り、その上に置き土をしてカマド壁体の粘土を設置している。その後、壁体の内側にさらに土を置き、火床面となる面が形成されるという順序で構築されている。

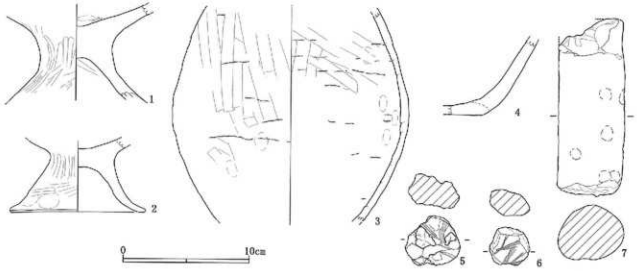
火床面下層の置き土からは土師器の高坏が２個体分検出されており（第４図１・２、図版３）、カマド構築にあたって何らかの儀礼的行為がおこなわれていた可能性を示唆している。また、カマド堀方の埋土にも炭化物や焼土が多く含まれていた。このことは、本カマド構築時には既に周囲にこうした炭化物や焼土が存在していたことを示しているから、同一住居内でのカマドの作り変えがあった可能性も想定してよいが、住居の一角のみの調査のため判然としない。

遺物　遺物の多くはカマドの崩落土や掘方埋土の中から出土している。中でもカマド掘方埋土内から出土した遺物は、カマド構築時に故意に埋納された可能性もあり注目される。

１は高坏である。脚部と坏部の境界付近の破片であり、全体の形態を知ることはできないが、坏部は外方に向かって直線的に広がる形態であると思われる。脚部は下方に向かってスカート状に広がる形態である。脚部と坏部の接合方法については判然としないが、やや厚みのある形態である。内外面ともにミガキ調整で器表面が整えられている。土器の形態から、６世紀末頃、須恵器形式のTK43型式期頃のものと考えられる。２も高坏である。脚裾部から坏部との境界にかけての破片である。脚部は低く、緩やかに外湾しながら下方へ広がる形態で、端部は丸く納められている。坏部の形態については不明であるが、椀形になるものと推測できる。やや風化が進んでいるが、外面には指オサエの後にミガキによる調整が施されていることがわかる。内面にも、わずかであるがミガキ調整の痕跡が認められる。脚内面には指オサエやナデ調整が認められる。土器の形態から、６世紀末頃、須恵器型式のTK43型式期頃のものと考えられる。３は甕である。胴部の破片で、口縁部や底部の形態を知ることができないが、残存部分から胴部中位が最大径となる形態であり、やや小型で胴長の器形ではないかと考えられる。内外面ともに指オサエによる成形痕跡の後に工具ナデによる器面の整形痕跡が認められるが、調整が粗雑で粘土継目の痕跡が明瞭に残されている。胴部のみの破片のため、時期は判然としないが調整の特徴から古墳時代後期のものと思われる。４は甕である。底部付近の破片で、全体形を知ることはできない。平底に近い形態で、胴部は外方に向かって直線的に立ち上がっている。調



第３図　住居跡(S=1/40)



第４図　住居跡出土遺物

整は風化のために不明瞭になっているが、外面には底部と胴部の境界付近に指オサエ痕跡が認められ、内面には指オサエ痕跡、工具ナデによる調整が認められる。時期については判然としない。５・６は粘土塊である。不整形で焼きが甘い。粘土中に藁状の有機質圧痕が認められる。７は土製支脚である。火床面直上のカマド崩落土内から出土した。円柱状の形態で、断面形は不整楕円形である。表面はナデ調整により丁寧に仕上げられているが、所々に指オサエの痕跡が認められる。

第３節　古墳時代以外の遺構と遺物

溝状遺構（第５図）

遺構　調査区中央で検出された。幅1.6m、調査区を南北に横断して伸びる溝状の遺構で、調査区内での長さは6.6mである。この遺構も耕作などによる撹乱のため、遺存状態が悪く、遺構底面からわずか15cmだけが残されていた。底面はおおむね平坦で、両壁ともゆるく立ち上がっており、断面形態はＵ字形となる。底面平坦部の幅はおおよそ1.1mである。遺構の一部のみの調査で、かつ遺存状態も悪かったことや、出土遺物も少なかったことなどからこの遺構の性格を判断することはきわめて難しい。また、遺構の時期についても不明確であるが、出土遺物から古代以降であることは判断できる。本調査区の南に隣接している王楽寺が中世段階において繁栄していたことを考えると、この遺構も王楽寺に何らかの関連がある可能性がある。

遺物　埋土中から土器片が出土している。土師器片が主であるがいずれも小片で、図化に耐えうるものはきわめて少なかった。図化に耐えうる２点について第５図に示した。８は須恵器の高台付皿である。浅い器形で、口縁部は外方に向かって短く立ち上がっている。焼きが甘く、軟質であり、器表面の色調は白灰色である。９は坏である。口縁部の小片で、内外面に回転ナデによる調整が認められる。

ピット

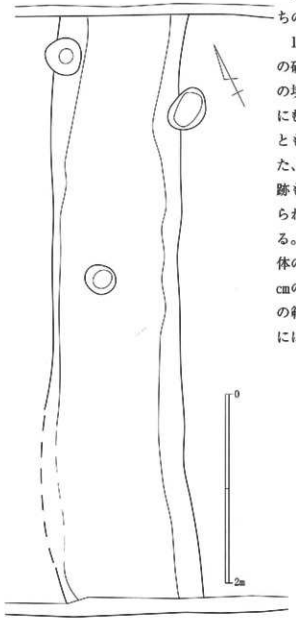
遺構　７基のピットが確認された。いずれもおおむね円形で、深さは約20cmから40cmである。調査区内において列状に並ぶものは確認されなかった。

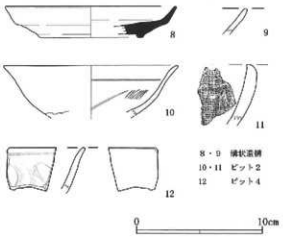
遺物　10は青磁の皿で、口縁部から胴部にかけての破片である。外面底部側は一部露胎している。釉は黄色味を帯びた色調で、器内面にはヘラ描きによる文様が認められる。16世紀代に位置付けられる。11は焼塩土器である。手捏ねによって成形されており、口縁端部は内側に向かってわずかに折り曲げられている。内面には繊維圧痕が認められる。12は青磁碗で、口縁部付近の破片である。外方に向かって広がる形態で口縁端部はわずかに屈曲している。内面にはヘラ描きによる文様が描かれている。小片であるため時期的な位置付けは判然としない。

第４節　遺構外出土遺物

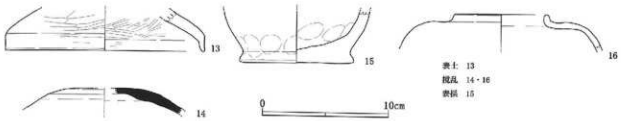
遺構外からもいくつかの遺物が出土した。そのうちの４点を第６図に図示した。

13は土師器模倣坏で、口縁部から天井部にかけての破片である。表土から出土した。口縁部と天井部の境界はやや丸みを帯びた形状で、口縁端部は外方にむかってわずかに広がっている。器表面は内外面ともミガキ調整によって丁寧に整えられている。また、器外面天井部にはミガキ調整前の工具ナデの痕跡も認められる。６世紀末～７世紀前半に位置付けられる。14は須恵器坏蓋で、天井部付近の破片である。攪乱土層中から出土した。小片であるため、全体の器形を知ることができない。外面には、幅約１cmの回転ヘラケズリ痕跡が確認できる。ヘラケズリの範囲は天井部の半分程度であろうか。天井部内面には横方向の仕上げナデが施されている。小片で時





第５図　溝状遺構、溝状遺構・ピット出土遺物



第６図　遺構外出土遺物

期の判断が難しいが、６世紀後半～７世紀前半に位置付けられると思われる。15は土師器甕で、底部付近の破片である。底部は平底で中央付近の厚みが薄い。また、底部外面には繊維圧痕が認められる。底部と胴部の接合部分には、内外面ともに指オサエ痕跡が認められ、その後ナデにより器表面の調整がおこなわれている。16は陶器の壺である。口縁部付近の破片で、口縁部は直立して短く立ち上がっている。

第１表　遺物観察表

番号	種別	器種	出土位置	法量（cm）			調整		備考
				①	②	③	内面	外面	
1	土師器	高坏	住居跡	—	—	—	指オサエ・ミガキ ナデ	ミガキ	
2	土師器	高坏	住居跡	—	10.7	—	ミガキ 指オサエ・ナデ	指オサエ・ミガキ	
3	土師器	甕	住居跡	—	—	—	指オサエ・工具ナデ	指オサエ・工具ナデ	
4	土師器	甕	住居跡	—	—	—	指オサエ・工具ナデ	指オサエ・ナデ？	器面風化著しい
5	土製品	粘土塊	住居跡	3.9	4.4	2.4	—	—	篠状の繊維圧痕あり
6	土製品	粘土塊	住居跡	2.9	3.2	2.1	—	—	篠状の繊維圧痕あり
7	土製品	支脚	住居跡	14.0	5.3	4.4	—	指オサエ・ナデ	
8	須恵器	皿	溝状遺構	(13.7)	(8.2)	2.5	回転ナデ	回転ナデ	器面風化著しい
9	土師器	坏	溝状遺構	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	
10	白　磁	皿	ピット２	(13.9)	—	—	—	—	
11	土師器	焼塩土器	ピット２	—	—	—	繊維圧痕	指オサエ	
12	青　磁	碗	ピット４	—	—	—	—	—	
13	土師器	模倣坏蓋	表土	(15.8)	—	—	ミガキ	手持ヘラケズリ・ミガキ	
14	須恵器	蓋	攪乱	—	—	—	回転ナデ・仕上げナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	
15	土師器	甕	表採	—	(9.2)	—	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	
16	陶　器	壺	攪乱	(7.3)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	

※法量の①・②・③は、土器の場合それぞれ口径・底径・器高を、それ以外の場合は長さ・幅・厚さを示す。（　）は復元値であることを示す。

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査は、携帯電話用通信無線基地局建設にともなう事前の発掘調査である。調査地は、舌状に突き出した竹篠丘陵と通称される丘陵上の平坦面に位置している。今回の調査で、これまで調査事例が少なく、不明な部分の多かった当該地域の様相について、いくつかの知見を得ることができた。

まず、古墳時代後期の住居跡が確認されたことがあげられる。住居跡は、大部分が調査区外にあり、住居南東隅の一部を確認したのみであったが、作り付けのカマドをもつ住居跡であることが確認された。出土遺物から、古墳時代後期、６世紀末頃に位置付けられる。調査地周辺で、これまでに古墳時代の集落跡が確認されたのは丘陵基部付近にある伊屋ヶ谷遺跡の古墳時代後期の住居跡１軒のみである。今回の調査で竹篠丘陵平坦面上にも古墳時代集落が展開していたことが明らかとなった。丘陵頂部の平坦面は、丘陵縁辺部まで広がっており、その付近まで集落が展開していた可能性は高いだろう。また、竹篠丘陵東斜面側の谷部を中心として、60基以上の横穴が存在する「瓜生野村古墳」が所在している。調査例が極めて少なく詳細は不明であるが、調査がおこなわれた瀬戸前１号横穴、瓜生野村古墳30号横穴は須恵器形式でTK209型式期～半上りⅡ型式期に位置付けられており、周辺に分布する横穴群もおおむねこれに前後する時期のものと考えられている。この年代観は、今回確認された住居跡のものとほぼ同じ時期にあたり、集落に住んだ人々と、横穴に葬られた人々との関係が注目される。

古代以降の遺構では、溝状遺構が確認された。調査地南に隣接する王楽寺は、室町時代から天正・慶長年間に大いに栄え、周辺には十二支院が広がっていたと言われている。今回調査地もかつてはその王楽寺の範囲に含まれていた可能性は十分に考えることができ、今回確認された溝状遺構もそれらと何らかの関係を持つものであるかもしれない。確認範囲も狭く遺存状態が悪いことや、遺物量も少ないために、性格については不明な点が多いが、可能性の一つとしてあげておきたい。加えて、古代以降に位置付けられるいくつかの遺物が出土している。今回の調査では、これらの時期のものと明確に判断できる遺構は確認されなかったが、周辺には古代以降の集落も広がっているものと推測できる。

以上、今回の調査で明らかとなったいくつかの点について触れてまとめとした。竹篠丘陵上における調査例はこれまでになく、各時代における様相は明らかでない部分が多い。しかし、調査地周辺において、人々の生活が連綿と続いてきたことは今回の調査成果で明らかである。竹篠丘陵東側にある下北方地区同様に非常に多くの埋蔵文化財が存在することも考えられる。今後、今回の調査成果を含め、周辺の様相をさらに検討していく必要がある。

<参考文献>

吉本正典ほか編2003『瀬戸前１号横穴墓　瓜生野村古墳30号（横穴墓）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第72集　宮崎県埋蔵文化財センター

今塩屋毅行・松永幸寿2002「日向における古墳時代中～後期の土師器―宮崎平野部を中心にして―」『第５回九州前方後円墳研究会　九州における古墳時代中～後期の土師器』九州前方後円墳研究会

調査風景（北から）

図版1

上：調査地全景（南から）
中：調査区北壁（南から）
下：遺構検出状況（南から）

図版2

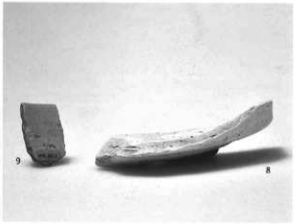
上段左　：住居跡完掘状況（北から）
上段右上：カマド縦断面（火床面上、西から）
上段右中：カマド縦断面（火床面下、西から）
上段右下：カマド横断面（火床面下、北から）
下段左　：カマド煙道入り口部分（北から）
下段右　：カマド掘方完掘状況（北から）

図版3

上段　住居跡掘方完掘状況（北から）
中段　左：住居跡掘方断面（北から）
　　右：住居跡出土遺物１
下段　住居跡出土遺物２

図版4

上段　溝状遺構検出状況
　　（北から）
下段　左：溝状遺構断面
　　（南から）
　　右：溝状遺構出土遺物



図版5

左　ピット出土遺物
下　遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たけしのいせき
書名	竹篠遺跡
副書名	携帯電話用通信無線基地局建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第93集
編集者名	西嶋　剛広
発行機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒880-0805　宮崎市橘通東1丁目14番20号　TEL. 0985－21－1836
発行年月日	2013年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
竹篠遺跡	宮崎市大字瓜生野 字竹篠1015番1	45201		31° 58′ 12″	131° 23′ 47″	H. 24. 6. 18 ～ H. 24. 7. 6	49㎡

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
携帯電話用 通信無線基地局	散布地	古墳	住居跡	土師器	作り付けカマドを持つ古墳時代後期の住居跡が確認された。

要約	古墳時代後期の住居跡が確認された。遺跡が所在する丘陵ではこれまで古墳時代の集落跡は未確認であったが、今回の調査でその存在が明らかとなった。周辺に存在する横穴群との関連が注目される。

宮崎市文化財調査報告書　第93集

竹篠遺跡

携帯電話用通信無線基地局建設にともなう文化財発掘調査報告書

2013年3月

発行　宮崎市教育委員会

宮崎市埋蔵文化財センター・遊古館